

ることは軽工業の発達を示すものである。更に、第三次産業の商業・金融業・自由業などにおいては、同上職業比率は二六・六％から二八・七％へと上昇している(前掲書)。

本県工業の業種と構成 明治四十二年における、富山県工場数の業種別構成比は、紡織(繊維工業)五〇・八％、化学一七・三％、金属機械一四・一％、食料三・二％、その他の工業一四・一％であり、全国的工業

水準に達していなかった。また、当時の本県の工業生産額構成比は、業種別にして、紡織五五・一％、化学三四・五％、食料四・一％、金属機械二・七％の順であった。

更に、明治四十二年における郡市別工業構造をみると、高岡市は、金属(銅器など)と紡織、射水郡は窯業・化学(売薬と肥料製造)と紡織、東砺波郡は綿織物(福野)と絹織物と食料(酒類が主)、西砺波郡は紡織と食料(酒類)、富山市は化学(薬業)、婦負郡は食料(酒類)と製茶が、各郡の主要産業であった。

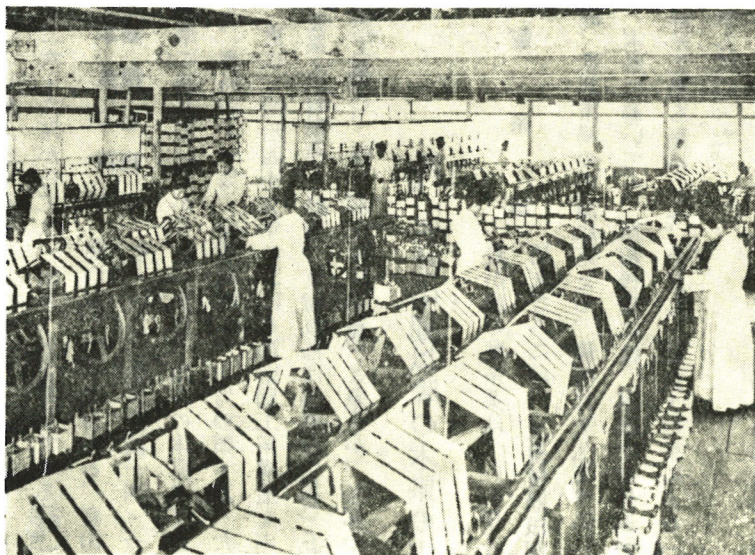
四、明治中期以降の本県の主要産業

製糸業 我が国の製糸業は、いち早く殖産興業の国策線上に立って、明治初期以来近代化を図った。明治末ごろには、大規模器械製糸と小規模器械製糸に、座繰生糸揚返製糸の三態が相まって発

展、世界市場の要請に応える、優秀品を生産するに至った。当時、日本の製糸業の地位は、世界的水準といわれた。

本県においても、明治後期には、座繰生糸揚返製糸も発達した。動力は、水力・蒸気力・それに人力による、機械製糸工場も漸増した。ただし、婦女子の手による「家庭的糸挽き」生産も、かなり残存しながら、本県の製糸業は進

また、明治四十一年七月、婦負郡生糸同業組合が県・郡・町の補助を受けて、八尾町に共同揚返場を建立した。目



婦負郡生糸同業組合共同揚返場 (『富山県蚕業沿革史』より)

ざすところは、組合員の製造した生糸を揚返して検査を行ない、共同荷造りをし、市場を開いて共同販売することになった。これは製糸業の近代化の一端であった(『富山県行。政文書』)。

明治二十三年には、県下の器械製糸工場は、次のように一〇二を数えて、本県製糸業の全盛期を呈出した(『明治二十三年富山県勸業第八。回年報』)。

上新川郡 八(内上市五)
 婦負郡 二五(内八尾一七、室牧三)
 下新川郡 一(魚津)
 東砺波郡 一二(内城端四、井波六)
 西砺波郡 五五(内福光五二、石動三)
 右は、いずれも職工十人以上の工場で、原動力は人力・水力・蒸気力。

ちなみにこの盛況は、座繰生糸揚返しによる品質向上、原動力に蒸気力採用の増加、輸出の伸びなどによって刺激されたと考えられる。

明治三十三年になると、次のように職工数一〇人以上雇用している工場が八十箇所減少する。

上新川郡 七(内上滝五)

中新川郡 七（上市）

下新川郡 一（加積）

婦負郡 七（内八尾四）

東砺波郡 二一（内平村五、青島三、東山見五、雄神三、井波二）

西砺波郡 三六（内福光三五）

富山市 一（泉町）

これは、明治三十、三十一年に起こった経済恐慌によるものであろう。当時、日清戦争後の異常な企業熱の反動を受けて産業経済界が、金本位制による為替相場の激変・米価騰貴・輸入超過・日銀正貨準備高の減少などの影響をうけて不況に陥ったのである。

更に、明治四十三年には、製糸業界が一段と変動してくる。工場数（職工数二〇人以上）は、次のように二十七と激減する。

上新川郡（上滝二、大沢野一）

下新川郡（萩生一）

婦負郡（八尾四、卯花一）

東砺波郡（東山見三、青島・雄神・上平三）

西砺波郡（福光一〇、広瀬館一）

明治初期に器械製糸に先駆けた、福光町と八尾町の後退は大きい。これは、明治三十三、三十四年に起こった、アメリカのニューヨーク市場の金融逼迫による生糸輸出不振の影響をまともに受けたことが第一原因である。そのうえに、日露戦争後、明治四十年一月以来、株式暴落・金融逼迫・銀行界の動揺・アメリカの恐慌などにより、生糸など紡織の輸出減退による影響が第二原因と考えられる。そして製糸業に代わって絹織物業が台頭してくる。

製糸業の推移を知る参考資料として、福光町と八尾町の同業戸数と生産を表で示すことにする（『富山蚕業沿革史』）。

第1表 福光町の製糸戸数

種別	年次	
	明治三二	明治三三
計	五八	一一三
足踏	二〇	八七
器械	三八	三六
		三三
		三四
		三一
		三三
		三一
		二八
		二〇
		二二
		一一

第2表 福光町の生糸生産額

種別	年次	
	明治三三	明治三五
計	三三五、八一〇円	二六二、五〇〇円
足踏	三三五、八一〇円	二六二、五〇〇円
器械	三三五、八一〇円	二六二、五〇〇円
		四一七、六〇〇円
		四四八、二五〇円
		四六二、〇〇〇円
		四六二、〇〇〇円
		四六二、〇〇〇円
		四六二、〇〇〇円
		四六二、〇〇〇円
		四六二、〇〇〇円
		四六二、〇〇〇円

第3表 八尾町の製糸戸数

種別	年次	
	明治三二	明治三三
計	二七五	二七五
足踏	二五〇	二五〇
器械	二五	二五
		二二
		二二
		二〇
		一七
		一七
		一六
		一七
		一一
		一一

第4表 八尾町の生糸生産額

種別	年次	
	明治三三	明治三五
生糸	四五五、〇〇〇円	二二五、〇〇〇円
	一九二、〇〇〇円	二六五、〇〇〇円
	二二五、〇〇〇円	二二五、〇〇〇円

右の表に見るように、器械製糸戸数よりも足踏製糸戸数が多く、零細生産が多かった。また、器械戸数が年次を降るにつれて漸減するのは、工場規模の大型化によるものと考えられる。

絹織物業

明治二十二年（一八八九）十月に、井波町の大谷彦次郎が、当時、石川県・福井県に興った輸出向機業にかんがみ、輸出羽二重の有望性を先見して製織に着手したのが、本県における輸出向絹織物の創始である（『井波町史』上巻）。井波町においては、明治三十七、八年のころ、この機業場は十一を数えて好況を呈したが、その後、日露戦争後の恐慌の影響をうけて、同四十三年には、六工場に減少した（『富山県統計書』）。

なお、同三十七年に「井波紬」が初めて織り出された。生皮苧や出殻繭を手先で細かく裂いて引延ばし、ひねりながら作る糸を製織するという、特殊技術の織物である。これを先染縞物・格子物・先染無地物に仕上げて、『越中縞』と呼んで販売された。値もあまり高くなく、丈夫な織物であったから、地元では「ふだん着」としてひろく愛用されたので、明治四十一年ごろは町内で約三〇〇〇反も生産されたのであった。後には、一般に「井波紬」の名称で親しまれて好評であった。

明治三十五年（一九〇二）に、上新川郡堀川村（現、富山市堀川）に、合資会社富山県織物模範工場が創立された。力織機で輸出羽二重を製織し、「シフォン」系統の製織を開始したので、以来、この強撚糸織物が盛んになった。従来の平羽二重製織者の多くがフランス縮緬（ジョーゼット）生産に重きを置くに至った。

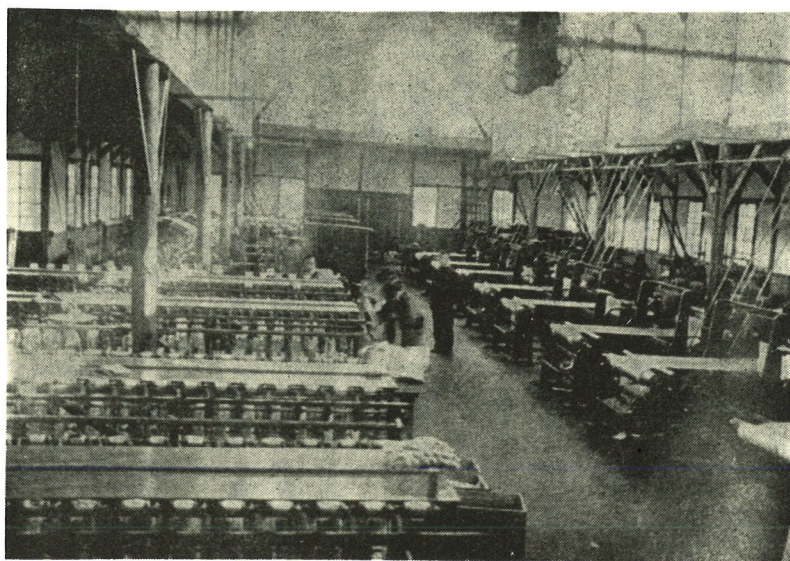
明治中期に入ると、城端町の絹織物機業の技術が発達し、経営の規模も大きくなった。日清戦争直後、「ボタン

第六章 資本主義経済の成長

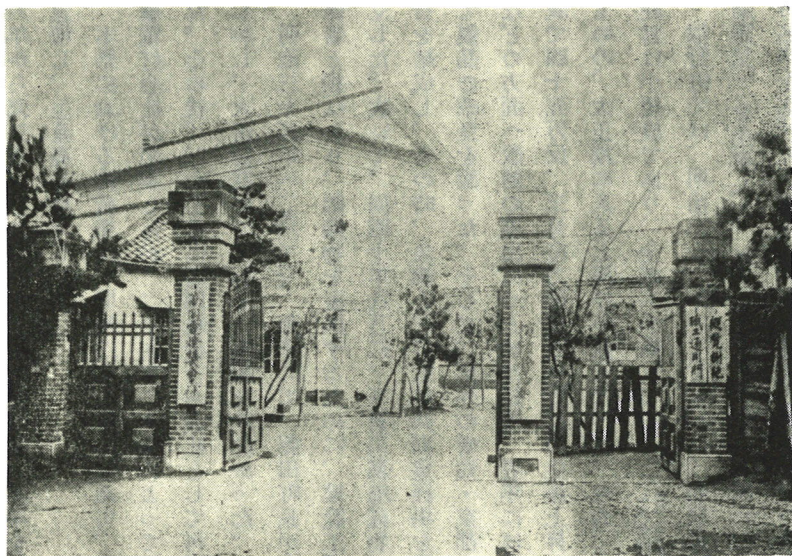
機織」が導入されて、これまでの「チンカラ機」よりも、二倍の能率があがるようになり、改良節絹が製織されることになった。更に、明治三十九年（一九〇六）に、新潟県五泉から羽二重製織技師佐々木兼助を招いて、城端羽二重と絹製織が始められた。以来、城端機業のマニユファクチュア化が進んだ。

次いで、明治四十三年に、山形県の斉藤外吉が発明した力織機が二十台、城端町の笹井工場に導入され、石油発動機による操業が行なわれた。また、同年に藤田機業場に撚機四十八丁が導入された。ここに、城端機織業の動力化が始まり、城端機業進展の一転機となった（『城端町史』（城端機業経済））。

明治四十三年（一九一〇）度の、輸出羽二重に関して、機業戸数は七十六戸で、同四十一年度の一〇一戸に比べると二十五戸の減である。これは、工場の職工雇用規模の増大化によるのであろう。それに対して、生産量は、同四十一年度の八万四七四六斤（価格九六万一四一五円）に比べて、一万二七七八斤（価格一六万九五〇〇円）で、約一八％（価格は二二円）増となっている（（明治四十三年）富山県統計書）。これは、力織機の使用



富山県織物模範工場内部（『富山県写真帖』より）



高岡紡績合名会社

『富山県写真帖』より

工場増と手織機の使用工場減により、その生産性が向上したためであると考えられる。また、機業戸数と生産高の多いのは、中新川郡が三十一戸で一位、次いで西砺波郡の二十戸、婦負郡が十三戸である。力織機使用工場では、中新川郡の二三六台がトップで、次いで西砺波が一七五台、富山市が三十台である。ここにも原動力の機械化による近代産業への前進が見られる。

明治三十八年（一九〇五）十二月より、従来、輸出絹織物同業組合が自ら行っていた「羽二重検査」を、県の事業として実施することにした。これによって同業者間の情実弊害が除かれて、信用を得るようになった。

また、翌年五月、県では県下の八精練場を一株式会社と併合して、補助金を出して運営の完全を期した。かくて、各精練場間の割引競争による粗悪品の出ることを防止した（富山県行「政文書」）。

県下各地の紡織業

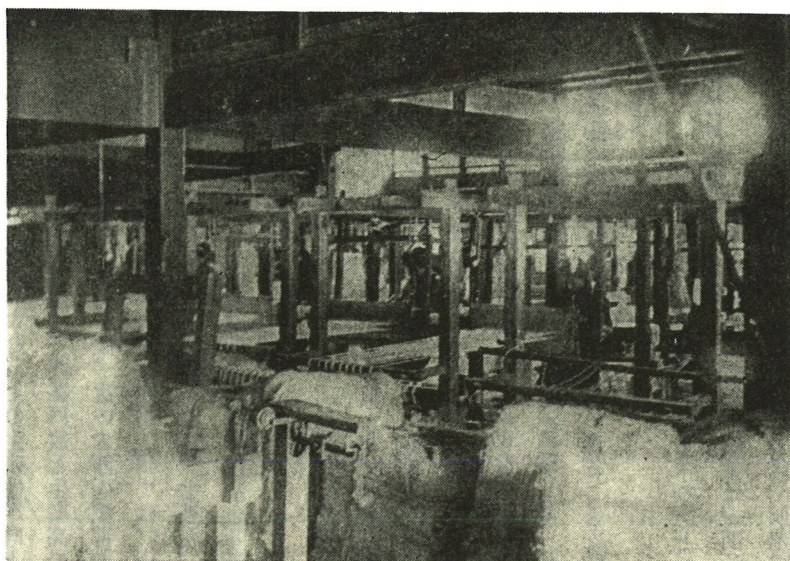
我が国の殖産興業の先陣のひとつとして発足した官営紡績業は、明治十年代後半には民間企業として伸長した。その後、明治二十

六年から同三十一年にかけて、紡績機の輸入が年をおって急増し、生産高も増大した。

本県における紡績業は、明治二十七年に初めて、高岡紡績電灯会社が開業したが、二十九年に不況によって解散した。その後、三十七年に高岡紡績合名会社として再開した。しかし、大正初期まで、新しい進展をみなかった。

明治三十五年（一九〇二）、魚津にて、藤田町長が有志関係者と相はかり、綿織物を振興するために、模範工場を設立した。次いで、同四十年八月に、下新川郡綿織物同業組合を結成し、その時、魚津と三日市に共同整経場を設置して製品の改良を図った。そして、県外の愛知・京都・新潟などの方面へ販路の進出につとめた結果、翌年には魚津区域で四十五万反、三日市方面で五十万反の生産上昇をみたものの、大正期に入ると再び不振となった。なお、当時の経営は小規模であり、全部が手織りであった（『魚津市史』下巻）。

福野町では、明治三十二年（一八九九）に、新製品の「瓦斯海気」を生産した。艶づけがよくなり、優れた綿織物の名声をあげて、北陸における綿織物の主産地の地歩を固



新川織物株式会社

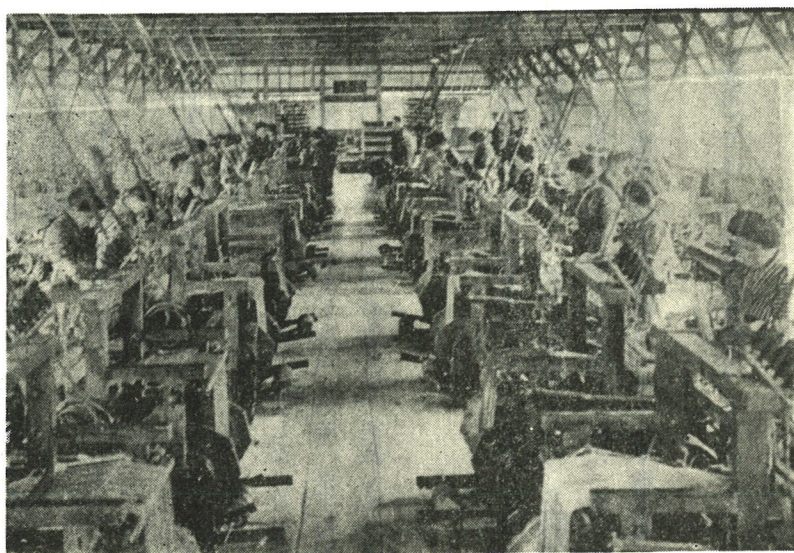
（『富山県写真帖』より）

めた。その後、同三十五年ごろに至り、粗悪品が出回り、一時、不評を招いたので、織物同業組合を結成して、品質の改良と製品の検査と組合員の親睦を図り、販路の拡張につとめた。こうして販路は、北陸三県を始め、遠く北海道・秋田・東京・更に海外の朝鮮・中国・南洋方面にまで広がっていった。生産も明治末期には、福野縞が約三十万反余、双子縞が一四、五万反、その他が六万反、合計五、六〇万反、金額約五十万円に達した。しかし、生産者の大部分が小企業であり、製織も多くは「出し機だしばた」といって近隣の農家へ賃織りに出して、手織りであった。このために規模の大きい工場制への発展は望めず、真の近代化は、大正期に入ってから進んだ（福野町史）。

砺波郡戸出町（現、高岡市）では、明治十一、二年ごろから、木綿織物を始めようとする動き、同二十一年に絹織物を始めて地元産業の振興を図る動きがあったが、実現しなかった（戸出町史）。

その後、明治二十六年末に、資本金一万五千円で、戸出物産合資株式会社が創立されて戸出縞（綿織物）を生産した。

第一節 商工業の近代化



戸出物産株式会社工場内

（『富山県写真帖』より）

次いで同二十九年に資本金に三万五千円を増額して、組織を戸出物産株式会社と改めて、今日に至っている（前掲書）。同三十五年には、新たに綿織物と絹綿交織物の、戸出織物株式会社が創立された（前掲書）。

滑川では、明治二十年ごろ、当時滑川町の染物業者、高井・岩城らが家業の付帯事業として、木綿製織したのが同地織物業の始まりである（滑川市誌）。

また、明治二十年ごろ（一八八七）、上新川郡音杉村では、上市木綿（新川木綿）が衰退していくのを憂え、当時の村長細川庄左衛門が輸出向羽二重の製織へ転換を企画した。まず、先進地の石川・福井県などへ出向いて視察し、現地の業者の指導を受けて、同二十四年に生産に着手した。次いで、同二十七年に、酒井・土肥らが同業を開始した。その後、有沢・細川一族が共同して、合名会社を創立した。これが現在の細川機業株式会社の前身である。当時、県下の羽二重総生産額四万一千七百七十二疋（ひき）（二疋は二反）の六〇％以上に当たる二万五千八百〇〇疋を、上市町の機業場で製織して、県下の絹織物業界にその名をひびかせた（上市町誌）。

明治二十六年（一八九三）に、富山市でも、輸出向絹布の生産が始まった（富山県史近世史、科編Ⅱ近代Ⅰ上）。

明治三十年代の中ごろ、入善町で、青木地区に北機業場、梶山に大和工場その他の機業場、舟見に野島機業場が開業していた。しかし、明治四十年（一九〇七）以後、羽二重価格の暴落に見舞われて、次々に廃業していった（入善町誌）。

明治四十三年（一九一〇）七月、小杉町の須藤・片口・岡田らによって、小杉綿織物株式会社が創立された。女工二、三〇名による小企業にて木綿の手織りが始められた。なお、これより先に池多地区と黒河地区にも木綿手織工場が創業したが、明治末年の経済恐慌により、次々に倒産した（小杉町史）。

麻布の生産は、明治前・中期に漸減傾向にあったが、出町（現、砺波市）では、日露戦争後から、軍需品としての特需をうけて、麻問屋の取引が活況を呈した（砺波市史）。

第5表 年度別主要織物生産高表

年号	綿織物	絹織物	絹綿交織物	麻織物
明5	年間約100万反※			
6				
7				
8				
9	↓			
10	832,410反			
11	825,530			
12	742,380			
13	666,980			
14	665,660			
15	558,840	67,000匹	井波・城端のみ 16年の年報による	17,770匹
16	539,406	37,000	井波・城端のみ	13,090 66,722反
17	237,780	23,100	井波・城端のみ 反にすると64,200反	18,294 59,147
18	190,570 砺波郡の資料欠	70,890反		152,910 36,490
19	227,704 462,904 ※※	77,780		135,600反
20	669,881	102,930		185,350
21	672,345	153,380		175,200
22	460,051	131,430		158,650
23	602,847	160,600		161,586
24	719,601	216,322	35,860反	137,595
25	180,820 砺波郡の資料欠	249,200	100,000	112,640
26	445,548	264,336		70,900
27	473,934	147,838	8,865	63,800
28	914,733	251,211	27,847	67,150
29	890,436 3,450本	352,289	45,572	100,820
30	740,403 3,620	271,959 140本	35,446	113,192
31	970,104 他に3,710	400,960	34,258 他に263本	90,650
32	1,417,254 4,000	481,057 他に540	62,660 30	92,436
33	1,438,774 4,154	159,595 25,915	53,320 411	122,045
34	1,129,754 4,215	130,514 164,938	46,228 343	179,620
35	1,586,520 3,324	594,026 10	48,062	146,518
36	763,849 475	106,389 60,408	10,987 60	78,380
37	504,120 30	30,199 111,537	216 35	149,452
38	819,122 55	111,750 103,450	277 30	179,486
39	1,401,877 45	95,194 113,674斤 2,906テ	791 35	255,988
40	1,793,914 137(帯地)	160,658 67,538斤(羽二重) 106,450テ(上新川の平均)	12,037 10,154(シュス)	437,369
41	1,942,754 129	134,363 84,746斤 95,450テ	26,055	477,778
42	1,746,794 230	160,733 91,280斤 123,300テ	62,477 33,200	429,802
43	1,327,155 154	172,412 100,276斤 290,450テ	114,088 9,000	383,553
44	1,469,283 165(綿ネル地)	224,870 103,750斤(羽二重) 410,350テ(シフホン)	20,315 9,514(シュス)	478,209
45		160米(女帯地)		

注 1. 明15～17年の麻織物の統計は砺波地方のみを記載。
 2. ※は『越中史料』巻四所収の、明治5年4月の新川県より大蔵省への御調理書上中の「諸産物一ヶ年出来高大綱見込」による。
 3. ※※は20年版の統計に出ている綿織物の数値である。

第6表

年度別麻織物郡別生産高表

西歴	年号	新 川 郡			婦負郡	射 水 郡		砺 波 郡		富山市・高岡市	合 計
		上新川	中新川	下新川		射水	氷見	東砺波	西砺波		
1867	慶3										
1868	明1										
1869	2										
1870	3										
1871	4										
1872	5										
1873	6										
1874	7										
1875	8										
1876	9										
1877	10										
1878	11										
1879	12										
1880	13										
1881	14										
1882	15										
1883	16										
1884	17										
1885	18										
1886	19							135,600反			135,600反
1887	20							185,350			185,350
1888	21							175,200			175,200
1889	22							158,650			158,650
1890	23							145,000		16,586	161,586
1891	24							122,300		15,295	137,595
1892	25							福野 20,000 福光 91,000 戸出 1,640			112,640
1893	26							35,560 25,400 10,030			70,900
1894	27							10,000 48,000 5,900			63,800
1895	28							10,000 48,000 5,850			67,150
1896	29							47,910 50,510		2,400	100,820
1897	30							51,960 52,232		9,000	113,192
1898	31							46,950 33,700		8,000	90,650
1899	32										92,436
1900	33							66,830 42,620	2,095	10,500	122,045
1901	34	—	—	—	—	—	—	79,930 82,620	1,995	15,075	179,620
1902	35	—	—	—	—	—	—	47,765 83,680	—	15,073	146,518
1903	36	—	—	—	—	—	—	25,340 40,340	—	12,700	78,380
1904	37	—	—	21,000	—	—	—	24,302 24,150	—	80,000	149,452
1905	38	—	—	—	—	—	—	47,990 71,490	—	60,006	179,486
1906	39	—	—	—	—	—	—	44,362 131,440	—	80,186	255,988
1907	40	—	—	—	—	—	—	123,395 123,798	16,176	174,000	437,369
1908	41	—	—	—	—	—	—	139,046 136,436	2,296	200,000	477,778
1909	42	—	—	—	—	260	—	124,006 129,536	—	176,000	429,802
1910	43	—	—	—	—	240	—	173,228 144,534	—	65,551	383,553
1911	44	—	—	—	—	848	—	223,900 138,050	—	115,411	478,209
1912	45										

第7表 組織関係の工場・職工・原動力機関数

(明治四十二〜大正二年)

十二月三十一日現在

郡市名	工場			職工			機関				
	織物	生糸	その他	計	男	女	計	電気	水車	汽機	石油発動機
上新川郡	二	一	一	四	四	七	八三	一	一	一	一
中新川郡	七	二	八	一七	一七	四三	六三	二	三	一	一
下新川郡	八	一	一	一〇	一〇	三七	三六	五	四	一	一
婦負郡	一	三	二	五	四	一八	一七	一	三	一	一
射水郡	三	一	六	九	三九	三四	六五	二	一	三	六
氷見郡	一	一	五	五	五	一五	二〇	一	一	二	二
東砺波郡	元	三	四	五	五	五九	六六	一	二	七	一
西砺波郡	七	二	四	三	一九	五〇	七九	五	三	二	一
富山市	四	一	四	四	六九	七四	一、三八三	二	一	一	二
高岡市	三	一	五	三	六六	四二	一、一八	二	一	二	六
合計	三	二	一四	一八	二、九八	三、七三	六、〇一	五	一六	八	六
大正元年	三	二	一四	一八	二、九八	三、七三	六、〇一	五	一六	八	六
明治四十四年	三	二	一四	一八	二、九八	三、七三	六、〇一	五	一六	八	六
明治四十三年	三	二	一四	一八	二、九八	三、七三	六、〇一	五	一六	八	六
明治四十二年	三	二	一四	一八	二、九八	三、七三	六、〇一	五	一六	八	六

一 本表及次表ノ工場ハ職工及徒弟ヲ通算シテ十人以上ヲ有スルモノヲ云フ

(大正二年「富山県統計書」)

第5、6表は、慶応元年(一八六七)〜明治四十四年(一九一一)までの四十七年間に於ける、主要織物の生産高と麻織

物の郡別生産高を表示したものである。両表は各年度の「富山県勸業年報」と同「富山県統計書」によってまとめたものである。また第7表は、大正二年の「富山県統計書」の工場統計によって、明治四十二年（一九〇九）〜大正二年（一九一三）までの纖維関係の工場数・職工数・原動力機関数について転載したもので、明治末期の県下工業の状況を参考にした。

売 業

文明開化の風潮の中で、国民生活に保健衛生の思想が広まり、売薬も新しい時代を迎えようとした。

しかしながら、先用後利の商法による富山県の売薬業にとっては、明治十五年（一八八二）に公布された「売薬印紙税規則」はまことに不合理な負担であった。以来、業界こぞって政府当局に撤廃を求めて反対運動が続けられた。同三十二年、全国同業者の一致した意向のもとに、印紙税全廃請願を、政府と貴衆両院に提出したが、容易に改正認可されることがなかった。その後、毎年、猛運動を続けた結果、同四十二年に至り、ようやく、売薬税法改正請願が採択されることになった。同四十四年に認可されて、「売薬業者は、薬剤一種毎に、一か年製造高の定価の総額に応じて、毎年、売薬営業税を納入することにする。そして、売薬品には定価の一割に当たる売薬印紙税を課する」ことに改正された。

明治二十六年（一八九三）七月、売薬業者らが相図って、画期的な事業として私立薬学校を開校して、教育面から業界の改善を志向した。その後、三十一年に同校は市立となり、同四十年に県立となり、更に四十三年からは、県立薬学専門学校に昇格した。

次いで、明治二十七、八年の日清戦争以後、販路を大陸にまで拡張した。同二十九年十月、富山売薬同志会を組織し、一層の改善発展を期した。

小杉町の製薬業は明治以後のものである。同十八年（一八八五）に青江兵作らによって厚生師天堂が創設された（『小杉町史』）。

上市町では、明治二十年（一八八七）ごろが起源のようである。同二十三年ごろ、沢井・池田らが相図って製薬所富国堂を創立したのが「くすりの町」の名を得た初めといわれる。また、同三十年に、富国堂が合名会社に改組し、同三十六年に、越中売薬合資会社が設立された（『上市町誌』）。

中田町の売薬の創始は、江戸時代の天保二年（一八三一）にさかのぼり、富山市の売薬を伝受したといわれる。明治二十年（一八八七）前後には、約一〇〇人の業者がいたようで、その伝統が明治・大正・昭和三代に継がれているのである（『中田町史』）。

明治時代においても、藩政時代以来の「先用後利」、いわゆる配置売薬の伝統をうけついで営業していた。また、明治後期には、新聞・雑誌などに広告宣伝をする業者が次第に増していった（『富山売薬紀要』）。

明治三十一年（一八九八）に、富山市内の売薬業者の有志が発起して、製剤の改善と販路の拡張を図り、得意先の信用と富山売薬の名声を高めるために、富山売薬同志会を結成した。次いで同三十四年に、法令をもって重要物産同業組合法が公布されたので、同志会々員の主だった人々が発起して、市内の一般業者と相計って、富山売薬同業組合を創設。更に翌三十五年に、業者の資金・貯金などの金融を図ることを目的とした、有限責任富山売薬信用組合を設立して、売薬業の発展を期した（『前掲』）。

明治四十一年（一九〇八）に至り、県下全般の同業者が団結した、富山県売薬同業組合が創設された。支部を、富山・魚津・滑川・東水橋・上市・東岩瀬・四方・小杉・高岡・氷見・中田・石動の二市十町に置いた（『前掲』）。

ちなみに、明治三十九年度の県下の売薬営業者は八七三人、行商人は七五一三人、製造方数七一四三、生産額二四九万二五九一円であった（『富山県売薬二。関スル統計書』）。

その他、郡市別売薬商人数・生産額については、『富山県史』の史料編Ⅵの九一二～一四頁に載っている。明治二十三年、三十三年、四十三年の三か年の統計表を参考にされたい。

明治四十一年（一九〇八）末における、主なる団体営業の社名は次のとおり。

第8表 売薬団体営業の社名一覧

名 称	所在地	創業年月	名 称	所在地	創業年月
広 貫 堂	富山・梅沢町	明治一〇・五	厚生師天堂	射水・小 杉	明治二〇・四
師 天 堂	・ 荒 町	一五・九	博 愛 堂	中新・東水橋	一六・六
精 寿 堂	・ 山王町	三一・六	配 薬 舎	・ 東水橋	一〇・四
富山薬業(株)	・ 星井町	三七・二	越中売薬・合資	・ 上 市	三六・八
富山薬剂(株)	・ 総曲輪	三二・一〇	富 国 堂	・ 上 市	三〇・七
(株)盛 貫 堂	・ 古鍛冶町	三二・七	高岡薬剂(株)	高岡・定塚町	三九・七
富山製剂(株)	・ 八人町	三七・二	保 寿 堂	中新・高月村	不 明
永 生 堂	・ 星井町	一五・五	岩瀬売薬(株)	上新・東岩瀬町	不 明
惣 盛 堂	・ 稻荷町	一八・一一	保 寿 堂	中新・西水橋町	不 明
(株)保 寿 堂	中新・滑 川	三七・三	四方広貫堂	婦負・四方町	不 明
合名・東洋薬館	・ 滑 川	三七・一二	富山売薬(株)	・ 四方町	不 明
北陸売薬・合資	・ 弓 庄	三三・七			

その他の諸工業

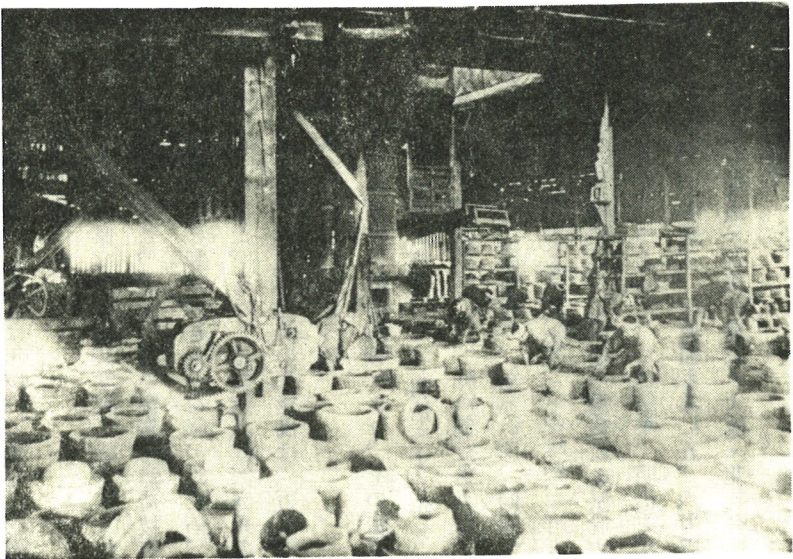
明治三十年（一八九七）ごろ、東砺波郡平村祖山に、土佐紙の四枚漉きの製法が伝授された。そして、従来の楮皮に代わって、土佐の三極みつまたと、新しい製紙用具を移入して、近代化への苦心が

始まった。その後、同三十五年に一漉き八枚取りの技術を
開発して、大量生産へと前進した。更に、同三十八年ごろ
から、バルプ入りの紙の新しい製紙技術が導入されて、生
産が伸びた。しかし小企業生産であったので、明治末年の
恐慌による不況の影響をうけて、大正から昭和へかけて、
養蚕業などへ転ずるものが漸増して、不振となっていた。

伝統工業の高岡銅器業も、明治後期に至り、近代化への
動きが見られ始めた。明治三十六年（一九〇三）三月、金屋
町の各工場では、新式の熔解炉・煽風器・達摩轆だまより・蒸気機
関などを据え付けるようになった。そして、同二十九年以
来、銅器着色の研究・意匠図案の指導・工業補習学校の設
置などにより、品質の向上と生産の増加を図り、全国的に
名を高めたので、販路も拡大された（高岡市史下巻）。

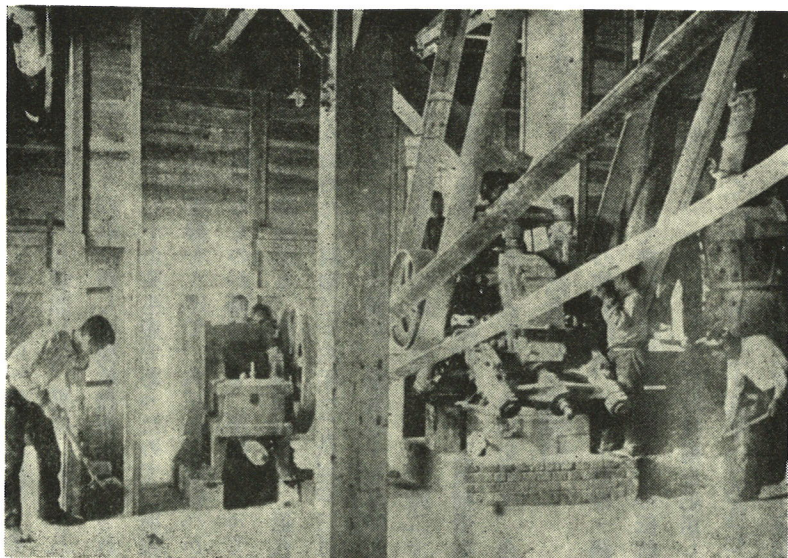
藩政時代以来、高岡の鋳物師は、火鉢・鉄瓶・鍋釜など、
銃鉄鋳物類も製作して来た。明治維新後もこの伝統を維持
して生産に当たり、いろいろと工芸的技術を応用したので、
鉄器は増産されていた。明治二十五年（一八九二）ごろに
は、金森七家・藤田六家・般若二家・高森家・富田家など

第一節 商工業の近代化



高 多 鋳 物 工 場

（『富山県写真帖』より）



北陸人造肥料株式会社の製造場

(『富山県写真帖』より)

二二工場があつて繁昌し、生産高は年に六万五千二〇〇個、金額は一万二千四百であつた。

また、同二十七年には県立高岡工芸学校が設立されたので、同校の研究指導により、意匠図案の刷新と鑄造技術の改善、あるいは琺瑯^{ほうろう}鉄器の製作創始などを図つたため、鉄鑄物の需要は益々伸びた。しかし主要製品は家庭用の鉄鍋釜類であつた。明治二十五年当時の生産高は六万五千三〇〇個、その金額は一万四千三百であつた。

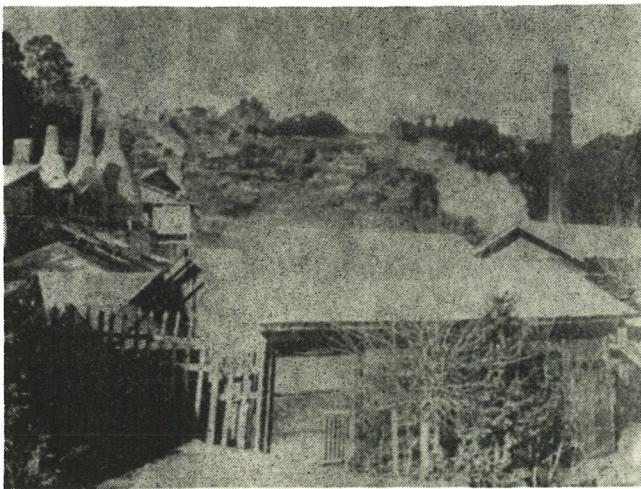
明治後期に至り、魚津町の勸業政策により、その指導と援助をうけて、魚津漆器が発展した。明治三十一年(二八九八)に「産業伝習生給与規定」が、町に制定された。幾人かの工芸伝習生を県立工芸学校へ、あるいは、同四十年には東京美術学校へ入学させている。このほか、町として、講習会・競技会を開催し、先進地へ視察員を派遣するなどして技術者の養成につとめた。この結果、明治末年には、製造戸数も四六戸を数え、生産額も年に五、六万円余に上昇し、販路も北海道・青森・東京・大阪・北陸各県へと拡大された(『魚津市史』下巻)。

日本の肥料製造の創開は、明治二十年（一八八七）十一月の、東京人造肥料会社の操業であった。本県においては、明治四十年五月、当時の県知事の要請により、北陸人造肥料株式会社が創立され、同四十二年十二月から生産が開始された。その後、農業における人造肥料需要が増進の機運に向かったので、生産の盛況をみるに至った。

明治二十年（一八八七）に、氷見郡の藪田・宇波両村の四か所に、烏丸伯爵がセメント工場を設けて生産したのが最初である。その後、廃業したが、大東セメント株式会社が代わって、藪田村の泊で再開したが、同三十八年に閉鎖した。翌年十二月、三越セメント株式会社が、その後を受け継いで再開した。

煉瓦の生産は、洋風建築・鉄道建設の需要に伴って、明治初年ごろから発達した産業である。明治七年（一八七四）の「府県物産表」によると、当時の主産地は、大阪・京都・堺・東京などの諸府県であった。

本県では、明治中期前後から、砺波郡石動地方・射水郡伏木地方などで生産された。石動地方では、明治二十二、三年（一八八九～九〇）ごろ、製瓦業者の石黒兵太郎が、同業の吉田・米田らと協同にて煉瓦製造を創開した。当初、先進地の堺（現、大阪府）・三河（現、愛知県）などから、熟練工を二〇人余り招いて、製法技術を習得した。



三越セメント工場株式会社（『富山県写真帖』より）

明治二十六年に高岡紡績会社建設に際して煉瓦一五〇万個の注文を受け製造納入した。次いで同二十九年に、北陸鉄道（いまの北陸線）敷設用に三五〇万個を納入した。このほか、銀行・会社・官公庁などの建築資材として大量に生産した。こうして明治から大正にかけて、石動地方は北陸最大随一の煉瓦生産地として名を高めた。しかし、大正時代にに入り、セメントが建築資材としてその需要を拡大してきたので、昭和以降、急激に生産が減少衰微するに至った。

なお、明治・大正時代における生産額の消長は次のとおりである。

明治三十五年	四六万六六〇〇個（四五・六二円）
同 三十九年	一〇四万四三七〇個（九九・五二円）
同 四十一年	四八六万九三〇〇個（七万五八三六円）
大正元年	一〇四万三〇〇〇個（二万九九二五円）
同 十四年	四六万八〇七一個（二万四〇四二円）

明治二十五年（一八九二）の「富山県統計書」によると、富山市で二五六〇貫（九六〇〇キログラム）、高岡市で五二二八貫（二万八三〇キログラム）のガラスが製造されている。また、明治四十五年ごろ、石動町でもガラス工業が始まった。福田ガラス工場では、医家の薬用瓶を主にして、各種のガラス瓶が量産された。大正年代に入ると更に工場が増設されて、酒瓶なども生産されて県外へも売り出されて繁栄した。

明治二十九年（一八九六）に、富山市の牧野平五郎が、富山鉄工場を創設したが、本県における近代的鉄工所の先駆であった。次いで、同四十五年に、佐藤工業株式会社が鉄工部を創設した。

明治三十六年（一九〇三）ごろ、西砺波郡福光町で、木製玩具の丸物・指物・擦糸用木管類が始められた。その後、機械の進歩と製品の向上と相まって、年々増産されていった。販路も東京・大阪の百貨店を始め、アメリカ・フラ

ンスなど海外にまで広まっていた。特に木製玩具は、その意匠図案の新しいさで好評を博し、後年にセルロイド製の廉価な玩具の出現を見るまで生産が続けられた（『福光町史』下巻）。

明治三十二年（一八九九）ごろ、新川郡三日市町（現、黒部市）の新川織物会社にて、経木（檜や杉などの材木を広く薄く削ったもの）の織物工場が設立された。これは、新川木綿の衰微を打開するために企画されたものであった。黒部の山地の官有林に繁茂するサワグルミ・ドロヤナギなどを原料として、暖簾のれん・壁張地・敷物などを製織した。暖簾は「敷島のれん」と称し、夏季用品として国内の需要が多かった。壁張地は海外向きの輸出として販路が拡まった。この製織は老人・婦女子の家庭内職として喜ばれて盛んに生産された。

また、日露戦争のころ、高岡市で手編みの経木きなだ真田編みも奨励されて、かなり製造された。以上、いずれも新生活向き用品の産業であった。

明治三十四年（一九〇一）に、滑川町の魚躬辰次郎が簾表製造を始めた。これは、江戸時代に旗本の戸塚某が案出した工芸品で、同三十二年ごろ魚躬が東京でその編み方を習得して来て帰り、開業したのであった。材料を東京から仕入れ、同町の深井衆次郎の資本協助を得て経営し、製品は富山・金沢など都市方面へ売り出して好評を得た。更に、同三十九年ごろから、新たに開業する者が増えて盛んになった。

その上、当時の中新川郡長が、この生産奨励に力を注いだので、郡内各地にも広く製織されるに至った。製品の販路も県外に広がり、本県は、千葉・茨城の両県と並ぶ、我が国の三大産地に発展した。その後、大正初期には、全盛期を迎えて、全国第一の産出を見るに至った。当時、深井の簾表製作所は、日本第一の簾表問屋とし名を挙げた。

明治二十三、四年（一九〇〇、一）ごろ、海外輸出用のレース（糸または羊毛で透けるように編み上げた装飾用の布）・皿敷類の製造が普及した。本県では、呉東では魚津・滑川・水橋・東岩瀬・四方方面、呉西では新湊・伏木・高岡・石動

方面で生産が盛んであった。婦女子の手によって美しく編み上げられて、国内はもちろん海外へも輸出された。

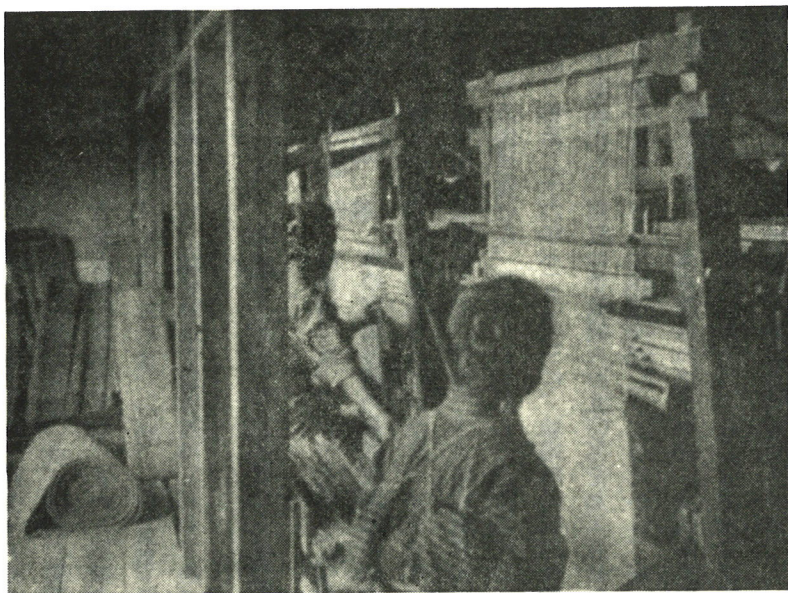
また、同じころ、富山市および西砺波郡石動町（現、小矢部市）で、それぞれにハンカチーフの刺繡工場を創設して、その生産につとめた。製品は主に輸出用の、絹ハンカチーフに刺繡したものであった。その後、出荷も多くなったので同業の工場がいくつか開業して盛んに生産されたが、大正の半ごろ以降、次第に衰退していった。なお、明治二十五年のハンカチーフ生産高は、富山市で二万四〇〇〇枚、石動町で二三〇〇ヤール、代価は二三〇〇円であった。

主として氷見地方における農家の副業的工芸農産品である。起源は江戸時代中期にさかのぼり、加賀国小松地方の藺栽培いぐさとその製作品を移入したといわれる。藩政時代のころ、氷見町の御座町で、莫蔞むろ類の大市が開かれてその名を知られていた（『氷見百』（年史））。

明治六年（一八七三）の「府県物産表」の新川県の部によると、畳表が三万八六五〇枚、莫蔞が四万八七〇〇枚生産されている。次いで「富山県勸業第一回年報」によると、同十六年の生産高は、畳表は射水郡氷見地方にて三万五〇〇束（一束一〇枚）を生産し、価格は三万円であった。当時、業者は三五〇戸、販路は主に県内・能登・越後・信濃・北海道に向けられた（『富山県史』（史料編）近代史）。

菅で作る笠は、福岡町地方における藩政初期以来の伝統的工業農産物である。加賀藩の保護奨励をうけて発達した。

明治以降には、福岡町を中心にその周辺の、醍醐・山王・大滝・立野・西五位・五位山・東五位・国吉、更に隣接の荒川・子撫など八五か村に菅栽培が行なわれて、菅笠の生産が盛んであった。「富山県勸業第一回年報」によると、明治六年（一八七三）に、八五五二本（一本二六〇蓋）、価格四万九五六〇円であった。当時、四五〇〇余戸が従業して



氷見蘭蓆工場

(『富山県写真帖』より)



福岡町菅笠工場

(『富山県写真帖』より)

いた。販路は県内はもちろん、遠く中国・四国・九州・東海・北陸の諸道にまで進出していた。なお、そのころは、一蓋の製作賃は金五銭から五銭五厘で、全く薄利の製造であった。しかし、県下唯一の最大生産地帯であった。十四年には、福岡町に菅笠会社が創立された。また、同四十三年ごろには越中菅笠組合が組織されて、製品技術の向上と販路の拡張を図っている。その後、一時、明治末期ごろから、不況に見舞われて需要が減少した。そこで、郡役所では、広急対策として、蘭蓆製造を指導奨励したのであった〔福岡町史〕。

五、本県工業界の組織化と施設の発達

本県最初の 同業組合組織

我が国では、明治十七年（一八八四）に農商務省令をもって、「同業組合準則」が公布され、各地の在来産業の組織化が図られることになった。本県でも同業組合準則を同年に告示した。そしてその加入は強制的に定められていたが、同三十年にその条項は削除された。

本県では、同業組織として、明治二十三年に高岡市の銅器商組合が結成されたのが最初である。この年、パリで開催された万国博覧会に、高岡から出品した銅器の花器が銀賞をうけたのが動機となったのであった〔富山県政史〕第六卷甲。

更に、明治二十六年（一八九三）に、城端町で岡部長右衛門が生絹問屋と仲人ら同業者とからって、生絹組合を結成して組織化し、同町の手織機人の九〇%を加入させた。組合のねらいは、織物の規格統一・検査制度の確立・販売法の円滑化などであった〔城端町史〕。このほかに、同三十一年に、氷見郡蘭蓆商同業組合が設立された。

養蚕・繊維関係の 同業組合組織

養蚕関係の組合組織は全国的に明治初年ごろから結成された。明治八年（一八七五）二月に蚕種製造組合条例と組合会議局規則が制定された。本県では、同十九年に富山県蚕糸組合が設立され、同四十三年に八尾蚕種同業組合が設立された。